

特発性肺線維症患者の胸部 CT で測定された脊柱起立筋と死亡原因、予後に関する後方視的検討

特発性肺線維症 (IPF) は、肺の線維化が進行性に悪化し、生存期間中央値が 2~3 年と予後不良の疾患です。これまで様々な予後予測因子が調べられてきました。

近年、慢性閉塞性肺疾患 (COPD) では胸部 CT 画像の脊柱起立筋の面積が予後と相関することが報告されており、IPF でも同様に脊柱起立筋の面積が予後予測因子となっているのではないかと考えられます。

そこで、2008 年 6 月から 2013 年 6 月までに公立陶生病院で IPF と診断された患者さんを対象に、該当する患者さんの胸部 CT 画像の脊柱起立筋の面積を含む診療情報を収集して解析を行います。

この研究では、集計・解析に際して匿名化して情報を取り扱い、対象者の個人情報を厳重に保護しています。上記に該当する方で、この研究についてのご質問や研究協力の拒否を希望される方がございましたら、お手数ですが公立陶生病院呼吸器・アレルギー疾患内科医師・古川大記（電話 0561-82-5101）までご連絡いただければ幸いです。

研究協力者：公立陶生病院 呼吸器・アレルギー疾患内科部長 谷口 博之

研究協力者：公立陶生病院 呼吸器・アレルギー疾患内科部長 近藤 康博

研究協力者：公立陶生病院 呼吸器・アレルギー疾患内科医師 古川 大記